中野香織の Luxury Quest [ラグジュアリー・クエスト] 特別版 贅沢の本質

Photos : HIROSHI TAKASE
Text : KAORI NAKANO
Styling : MAFUMI SHIMADA

Me bag

バッグと持ち主との愛ある知的な共犯関係とは?

エキセントリック・グラマーな自己プロデュースの達人が輝く時代?

映画祭のレッドカーペットに、最近、わくわくしない。スターのヘアメイクの洗練度は格段に上がっているし、宝石もドレスもかつてないほどゴージャスになったのに、なぜだろう…と考えていて、はっと気がついた。まさに、そうした点こそが「つまらない」理由なのだと。

わかりやすく「美しく」なるのは簡単なのである。一流の美容のプロの手を借り、選び抜かれた装身具をまとえば、女優たるもの、そこそこグラマラスには見える。でも、その規格化された円満な美しさに、心躍ることが少なくなってしまった。代わりに、といってはなんだが、つい目を奪われるのは、例えば、モデルのアギネス・ディーン、沢尻エリカ、そしてアラウンド40でブレイクしている女芸人…。エキセントリック・グラマーと呼びたくなる、自己プロデュースの達人たちである。「世間の標準」から気持ちよく逸脱し、オリジナルな個性で輝いているさまが、なんとも小気味よい。

どうやら、一定レベルの美がたやすく手に入るようになった今だからこそ、自己プロデュース力がものをいうようになってきたようなのだが、でも、自己って? 「自己とは自己自身に関係するところの関係である」(キェルケゴール『死に至る病』)。つまり、こういうふうにも考えられないか。

「美の規格からはずれる〈生〉な自分と、そこからちょっと距離を置いた〈主〉としての自分との、共犯者のような関係」と。セルフ・プロデュースとはつまり、〈生〉の自分とそれを面白がる〈主〉の自分との、愛ある知的な共犯関係を、外に向かって臆せず表現することにほかならないのではないか。

自己プロデュースを意識すれば、バッグに対するマインドも変わらざるをえない。セレブリティ保証付きの高価な「イット・バッグ」は、誰が持ってもサマになるゆえ、無難に素敵だが、所有者はバッグの影にかすむ。両者の楽しい関係が見えてこない。

持ち主のアイコン、「ミー・バッグ(Me bag)」の快楽

代わって、気になるのが、クロコやパイソンの、保守的なのに色が個性的なデンジャラス・クラシック系や、手の込んだ職人技が遊び心いっぱいにあしらわれるクチュール系、フリンジを駆使したボヘミアン系…。「いったい誰の手に?」と持ち主への想像をかきたてられずにいられないような、ひとくせも、ふたくせもあるバッグである。その難物(失礼)が、それを面白がり、愛することのできる知性とユーモアの持ち主の手にぴたりとおさまるとき、バッグと持ち主との美しき共犯関係が成立する。そのときバッグは、「ブランドのアイコンバッグ」ではなく、持ち主のアイコンバッグ、「ミー・バッグ(Me bag)」となって、「関係を結ぶ」快楽(ほかならぬ人生の快楽)をより深く味わわせてくれるだろう。

なかの・かおり●エッセイスト・服飾史家。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』(共に新潮社刊)など。2008年4月より明治大学特任教授に就任

自己プロデュースを意識すれば、
バッグに対するマインドも変わらざるをえない。

"シークレット・コード"という名のこのクラッチを「ミー・バッグ」と呼び、共犯者として相思相愛の関係を築く女性はどんな人なのだろうか。バッグ[W22×H17.5×D2]¥604,800(フェンディ/フェンディ ジャパン)